

聖書：コリント人への手紙第一 10：23～11：1

説教題：すべて神の栄光を現すために

日時：2022年9月18日（朝拝）

コリント人への手紙第一は、コリント教会の実情に照らして様々なテーマが次々に取り扱われている書で、これまで教会内の分派について、不道徳について、結婚・離婚・再婚について語られて来ました。そして8章1節から偶像に献げられた肉の問題について語られて来ました。今日の箇所はその最後の部分となります。その締め括りに当たってパウロはもう一度大切な原則を確認します。23節に「すべてのことが許されている」という言葉が「」で括られて2回出て来ますが、これはコリント人たちのスローガンであったと考えられます。すでに同じことが6章12節でこのように述べられていました。「『すべてのことが私には許されている』と言いますが、すべてが益になるわけではありません。『すべてのことが私には許されている』と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。」キリヤンハイエス・キリストを信じて、ただ恵みによって救われました。そのキリヤンハ今やキリストにあって律法の責めから解放されています。また救いのために良い行いをしなければならないという縛りからも解放されています。また以前のサタンの支配下にあった状態からも解放されています。キリヤンハまさにキリストにあって最も自由な人です。しかしコリント人たちはこれを強調し過ぎるあまり、バランスを欠いていたようです。パウロは23節で、「『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。」と言わなければなりません。つまりこのスローガンを合言葉とするコリント人たちの生き方は益をもたらしてはいなかった。また人を育てることにつながっていなかった。むしろこれまで見て来たように、他の人をつまずかせたり、滅ぼしたりするという悪影響をもたらしてました。そのような自由の発揮の仕方は間違っているということです。ですから24節でパウロは言います。「だれでも、自分の利益を求めず、ほかの人の利益を求めなさい。」キリスト者は確かに自由を与えられていますが、その自由は他の人の利益を第一に考えるという姿勢のもとに制限して用いられるべきであるということです。自分が持つ権利に関心を集中させるのではなく、どうしたら周りの人々がより祝福され、よりその人の成長につながるか、その関心のもとに自分の自由や権利を従わせることです。このことをパウロは今日の箇所の最後でもまとめとしてもう一度述べます。

さて偶像に献げた肉の問題について語って来たパウロは、これまで触れていなかった問いについてここで述べます。これまでは偶像の宮で偶像に献げた肉を食べるべきか否かという問題について語って来ました。これについてのパウロの答えは、それはダメであるということでした。それは悪霊と交わり、悪霊に従うことであると。

パウロはこれ以外の偶像に献げた肉に関わる二つの問いについてここでコメントします。まず一つは市場で売っている肉についてです。異教の町コリントでは偶像に献げられた肉が市場に卸され、店頭で売られていたようです。果たしてそういう肉は食べても良いのか、それとも避けるべきなのか。パウロはこれに対して、「どれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい」と言います。それを食べたら罪を犯すことになるのではないかなどと心配する必要はない。なぜならそれは罪を犯すという種類の事柄ではないからです。26 節に「地とそこに満ちているものは、主のものだからです」と詩篇 24 篇 1 節をもとにした言葉が述べられています。偶像の宮で偶像に献げた肉を食べることがいけないのは、それが宗教儀式であり、偶像礼拝の行為に当たるからでした。しかし市場で売られている肉は、そういうものとして売られているわけではありません。それは食用として売られています。ですから問う必要はないのです。食べ物として売られているのですから、食べ物として感謝して食べて良いのです。

二つ目は信仰のない誰かに招待された場合のことです。あるクリスチャンは偶像に献げた肉が出るかもしれないと心配して、その招待に応じない方が良いのではないかと考えるかもしれません。しかしパウロは、行きたいと思うなら行って良いし、そこで出されるものは問わずに食べなさいと言います。これも一つ目と同じですね。その人は偶像礼拝をするために招かれたわけではありません。そこで出されるものは食事として出されるのですから、問題なく食べて良いのです。問う必要はないのです。

しかしもし誰かが「これは偶像に献げた肉です」と言った場合はどうでしょう。この場合は考慮すべきことが出て来るとパウロは言います。さてこれは誰が言った言葉なのでしょう。またどんな意味で言った言葉なのでしょう。ここは解釈がなかなか難しいところです。誰がこう言ったのかについては4つのオプションがあります。一つ目は招いた家の未信者の主人。二つ目は主人以外のそこにいた未信者。三つ目は偶像に献げた肉を食べて良いと考えるクリスチャン。四つ目は、その肉は食べるべきでな

いと考えるクリスチャン。私はここを読んだ時、これはこの肉を食べるべきではないと考えるクリスチャンが同席していて、その人が他のクリスチャンに「それは偶像に献げた肉ですよ」と知らせた時のことかと思いました。しかしどうもその可能性は低いようです。これはあるクリスチャンがある未信者の家に招かれたというプライベートな食事です。そこに食べるべきではないと考える他のクリスチャンも同席しているという状況は想定しにくい。また仮にそうだとして、どうやってそのクリスチャンはそれが偶像に献げた肉だと知ったのか。人の家の台所に行って調理前に調べたのか？ またどうして食べる段になって、これはそうですよ！と言ったのか。知っていたならもっと早く言うはずではないか。またこういう肉が提供されることを普段から警戒するクリスチャンが、そういう食事が出る可能性の高い未信者の家に出かけるだろうかという問いもあります。しかし何よりも決定的なことは、ここで「偶像に献げた肉です」と訳されている言葉は、これまで使われて来た言葉と違うことです。原文で使われているのは「ヒエロストス」という言葉で、直訳すれば「聖なるささげもの」です。一方、これまで使われて来たのは「エイドーロストス」という言葉で、それは「偶像に献げた肉」を意味します。この後者は明らかにクリスチャンから見た表現です。しかし異教徒である人たちはそうは言わない。その人たちは「聖なるささげもの」と呼びます。その言葉がここで使われています。ですからこれは未信者の人、異教徒の側に立つ人の言葉と取るのが自然でしょう。それはクリスチャンを招いた家の主人かもしれませんし、そこに同席していた家族、あるいは友人かもしれません。ではどんな意味でその人はこの言葉を言ったのでしょうか。これについても色々な意見があります。ある人はこの未信者はこう述べてクリスチャンをテストしようとしたと言います。しかし友人として招いておいてテストするという意地の悪いことをするのでしょうか。また他の人はクリスチャンへの配慮からこう述べたと見ます。クリスチャンは気にするかもしれないから、一応これは偶像に献げた肉です、聖なるささげものですよとお知らせする。しかしもしそのように友人として配慮するなら最初から出すのを控えれば？と思います。残されたもう一つの解釈は、その人は良い意図をもってそう述べたというものです。つまり「これは聖なるささげものですよ。神々に献げた肉ですからご利益がありますよ。特別な祝福が伴っていますよ。」と言ってお勧めする。悪意からではなく善意からそう言ったということです。この場合、そう語った人のため、その人の良心のため、食べてはいけないとパウロは言います。その良心とは、知らせてくれた人の良心のことだとパウロは 29 節で述べます。これはどういうことでしょうか。これは未信者の人が「聖なるささげものですよ」と言って勧めた時点で、それを食す

ることは宗教的意味を帯びるということです。クリスチャンがそれを聞いて、「そうですか、そうですか」と言いながら、そのままそれにあずかることは異教信仰に同調することになります。未信者の人には、この人は異教の神の祝福と一緒にあずかろうとしていると受け取られることになります。ですからそう知らせた人のために食べてはダメだとパウロは言うのです。ここで「良心」と訳されている言葉は「確信」「自覚」という意味を持つ言葉です。そのままそれにあずかることは相手の確信に同意することになります。誤っているその生き方をそのまま励ますことになります。その道を行ってはいけないということです。

なおここは他の解釈を取っても方向性として結論は同じになると思います。ポイントは自分はこれを食べて良いかどうかという観点からでなく、その食べる行為が相手にどういう影響を与えるかという観点から考えて行動を決めるべきであるということです。相手の益を第一に考えて、そのもとで自分の行動を決することです。もし先の言葉を述べたのがクリスチャンであるとした場合も、それを受けてどう行動することが相手の成長を助けるかを良く考え、その光の下で自分の行動を律するということになります。

さてその後の 29 節後半から 30 節の言葉もさらに解釈が難しい部分です。話を難しくしないため、良いと思われる一つの見方だけを紹介しますと、パウロはここで「では私たちの自由はどうなるのか」と問うであろうコリント人たちの問いに答えているとするものです。29 節後半と 30 節でパウロはこう言っていると見ます。他の人たちの良心を慮って、その人たちに合わせた行動を取るからと言って、それによって私の自由がさばかれたり、失われたりすることはない。私の自由は私の自由として内的に保ったままであることができる。また 30 節は、私が感謝して食べるなら、その感謝することのために私自身が悪く言われることはない。私自身について言えばそうである。ただここでは相手の益を考えて食べない選択をするだけのことであり、このことであるというものです。クリスチャンは自分一人の観点から考えれば、誰からも侵されることがない自由を持っています。ただ他の人々の益を優先するがゆえに、進んで自分の自由に制限を課すことをするということです。

最後 31 節以降にクリスチャンの行動原則がまとめて述べられています。まず 31 節：「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をすることも、すべて神の

栄光を現すためにしなさい。」ここで「食べるにも飲むにも」と言われているのは、これまで食べること、飲むことの問題が扱われて来たからです。実にこういう事柄においてどう振る舞うかによって私たちは神の栄光を現すことができるということです。そしてもちろん食べたり飲んだりすることだけではなく、すべてのことにおいてどうすることが神の栄光を一番良く現すことにつながるかを考え、行動すべきであるということが言われています。その具体的な道筋が次に言われます。それはつまずきを与えないことです。神の栄光を現すと言うと、何か立派なことをすることのように思うかもしれませんが、その具体的な道は人々につまずきを与えないことです。周りには色々な人がいます。ユダヤ人、ギリシア人、神の教会、・・・。未信者である人に対しても、信者である人に対しても、つまずきを与えないように生活すること。それを積極的に言い換えたのが 33 節です。すなわち自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めることです。これは人々のご機嫌取りをするということではなく、人々の真の祝福に仕えること、その救いのために仕えることです。それは福音を知らない人が信じて救われるようになることも含みますし、信者である人が成長して最後の救いに到達することも含みます。

最後 11 章 1 節で、それはキリストに倣うことであると示されます。パウロは私に倣うようにと勧めていますが、そのパウロはキリストに倣っています。ですからそのエッセンスはキリストに倣うことです。確かにこれまで見て来たことはキリストご自身の生き方そのものと言えます。ローマ人への手紙 15 章 2～3 節：「私たちは一人ひとり、霊的な成長のため、益となることを図って隣人を喜ばせるべきです。キリストもご自分を喜ばせることはなさいませんでした。」ピリピ人への手紙 2 章 4～8 節でも「それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。」と述べられた後、キリストがご自分を空しくして十字架の死にまでも従われたことが述べられています。その姿に倣うことです。

以上、言われて来たことをまとめると次のようになるでしょうか。私たちはイエス・キリストを信じて、キリストにある自由をいただきました。本当に感謝なことです。私たちはもちろん偶像礼拝に当たる行為をしてはなりません、そうでなければ、たとえ偶像に献げた肉が市場で売られていても神に感謝してそれを食べることができます。個人としてはこの自由を感謝し、この自由に生きて良いのです。しかし私たち

は一人で生活しているのではなく、周りの方々と共に生活しています。そこにはキリスト者もいれば、そうでない人もいます。その周りの人々の究極的な祝福である、その人々の救いという一大目標に向かって、自分がつまずきにならないように、その成長に少しでも仕えることができるように、そのために進んで自分に与えられている自由を制限し、相手の益を図って生きるのが真に自由な人、クリスチャンであるということです。

これはキリストが私たちのために進んでくださった道でした。私たちはこのキリストのお姿をいつも仰ぎ見、感謝して、その足跡に従う道を行く者とされたいと思います。またパウロはただみんなでキリストに倣いましょう！と言ったのではなく、自らの生き方を示し、私に倣うことを通してキリストに倣いなさいと言いました。これは先を行く者たちにとってのチャレンジです。私たちも多くの先輩たちの姿を見てこれまでの信仰生活が導かれて来たと思いますが、願わくは私自身もそのような者として用いていただけますように。後続く人たちのために、その生活をもってキリストを指し示し、励ましを与えることのできる者となることを祈り、自らをささげる者へと導かれたいと思います。